

鴻仰宗の盛衰(五)

石井修道

目次

はじめ
仰山慧寂

仰山西塔光穆
晋州霍山景通

杭州文喜

五冠山順之

仰山南塔光涌

仰山東塔和尚

洪州觀音常鑑

福州東禪慧茂

福州明月山道崇

處州遂昌

十三 忠州月巖山月光寺大通
十二
十一
十
九
八
七
六
五
四
三
二
一

(以上第一八・一九号)

(以上第二十号)

十四

鄧州香嚴寺智閑

(1)

梁鄧州香嚴山智閑伝

(2)

香嚴智閑の大悟の因縁(一)

(3)

香嚴の大悟を仰山に驗(ため)される—仰山の評(一)

(4)

口に樹枝をくわえて西來意を問われれば

(5)

团扇をくるくるまわすとは

(6)

何が無表戒か

(7)

対境にとらわれない出会いとは

(8)

音の出る前の言葉とは

(9)

直截根源仏所印とは

(10)

古人の跡を指す頌

(11)

樂普との為人問答

(12)

勵覚吟

(13)

宗教を誠め物(もつ)を接する頌

(14)

香嚴下の僧と洞山との問答

- (15) 最後の頌
- (16) 常在の頌
- (17) 修行の頌
- (18) 鄭郎中に答える頌(一)
- (19) 鄭郎中に答える頌(二) — 機を發す頌
- (20) 清思の頌
- (21) 玄を談る頌
- (22) 学人玄機に与える頌
- (23) 渾淪の語の頌
- (24) 猶預して虚しく光陰を度ること莫かれ
- (25) 古を明かす頌
- (26) 崔大夫に与える玄を暢べる頌
- (27) 宝明の頌
- (28) 出家の頌
- (29) 法堂に寄せる頌
- (30) 玄旨の頌
- (31) 同住に贈る寂に帰る頌
- (32) 学を勧むる頌
- (33) 志を守りて得破する頌
- (34) 見聞を辞する頌
- (35) 分明の頌
- (36) 古路に遵う頌

-
- (37) 董兵馬使の与に説示する偈
 - (38) 志を専らにする頌
 - (39) 学人の宗教と宗如に与える頌
 - (40) 三句の後の意の頌
 - (41) 謐号・塔号
 - (42) 香嚴の疎山匡仁への讖
 - (43) 香嚴の頌へ七六首
 - (44) 香嚴智闇の大悟の因縁(一)
 - (45) 道は悟によりて達す
 - (46) 何が香嚴の境か
 - (47) 何が仏陀婆か
 - (48) 何が正命食か
 - (49) 何が仏法の大意か
 - (50) 何が西來意か
 - (51) 枯木で龍が吟く(一)
 - (52) 四句百非を離れた言葉
 - (53) 滉山下の僧との払子の問答
 - (54) 偲頌二百余篇の流行
 - (55) 香嚴襲燈大師の頌へ一九首
 - (56) 香嚴はまだ祖師禪を得ていない——仰山の評(二)
 - (57) 臨濟下の三聖慧然が參す
 - (58) 枯木で龍が吟く(二) — 石霜・曹山の拈語

(59) 疎山と鏡清の香巌の語についての問答

(60) 西来意を問われば香巌の言葉を尻に敷け

十四 鄧州香巌寺智閑

(1) 梁鄧州香巌山智閑伝 (『宋高僧伝』卷一三)

①釈智閑、青州人也。身裁七尺、博聞強記、有幹略。親党觀其所以、謂之曰、汝加力学、則他後成佐時之良器也。俄爾辭親出俗。

②既而慕法心堅、至南方、礼鴻山大円禪師。盛会咸推閑為俊敏。鴻山一日召對茫然。將諸方語要、一時煨燼曰、画餅弗可充飢也。

③便望南陽忠國師遺跡而居。偶芟除草木擊瓦礫。失笑冥有所証。抒頌唱之。

④由茲盛化。終後勅謚襲燈大師、塔号^ヲ延福焉。

(大正藏五〇・七八五上中)

(2) 香巌智閑の大悟の因縁(一) (以下、『祖堂集』卷一九の香巌和尚の章)

茲に由り化を盛んにす。終りて後、勅して襲燈大師と謚し、塔を延福と号す。

①香巌和尚、嗣鴻山。在登州。師諱智閑。未覩実錄。時云青 — 香巌和尚、鴻山に嗣ぐ。登州に在り。師、諱は智閑。未だ

釈智閑、青州⁽¹⁾の人なり。身の裁⁽²⁾七尺、博聞強記にして幹略有り。親党、其の所以⁽³⁾を觀て之に謂いて曰く、「汝、如し学を力むれば、則ち他後、時を佐⁽⁴⁾くるの良器と成らん」。俄爾に親を辭して俗を出づ。

既にして法を慕うの心堅く、南方に至りて鴻山大円禪師を礼す。盛会咸⁽⁵⁾な閑を推して俊敏と為す。鴻山、一日、召對するに茫然たり。諸方の語要を將つて一時煨燼して曰く、「画餅は飢えを充たすべからず」。

便ち南陽忠國師の遺跡を望みて居せり。偶たま草木を芟除⁽⁶⁾するに瓦礫を擊ち、失笑して冥に証する所有り。頌を抒べて之を唱う。

茲に由り化を盛んにす。終りて後、勅して襲燈大師と謚し、塔を延福と号す。

州人也。身方七尺。博聞利弁、才学無當。

実録を覗す。時に青州の人と云う。身の方七尺、博聞利弁にして、才学、当る無し。

②在鴻山衆中時、擊論玄猷、時称禪匠。前後數數扣擊鴻山、問難對答如流。鴻山深知其浮學、未達根本、而未能制其詞弁。後因一朝、鴻山問曰、汝從前所有學解、以眼耳。於他人見聞、及經卷冊子上、記得來者、吾不問汝。汝初從父母胞胎中出、未識東西時本分事、汝試道一句來、吾要記汝。師從茲無對、低頭良久。更進數言、鴻山皆不納之。遂請為道。鴻山云、吾道不当、汝自道得。是汝眼目。師遂歸堂中、遍檢冊子、亦無一言可對。遂一時燼之。有學人近前乞取。師云、我一生來被他帶累、汝更要之奚為。並不與之、一時燼矣。師曰、此生不學佛法也、余自生來謂無有當。今日被鴻山一撲淨尽、且作一個長行粥飯僧過一生。遂禮辭鴻山、兩淚出門。

鴻山の衆中にある時、玄猷を擊論す。時に禪匠と称す。前後數數鴻山を扣撃するに、問難對答は流れの如し。鴻山深く其の浮學にして未だ根本に達せざるを知るも、而も未だ其の詞弁を制すること能わず。後に因みに一朝、鴻山問うて曰く、「汝、従前の所有る學解は、眼耳を以てす。他人の見聞及び經卷冊子上において記得し来る者は、吾汝に問わず。汝、初め父母の胞胎の中より出でて未だ東西を識らざる時の本分の事、汝、試みに一句を道い來たれ。吾、汝を記せんと要す」。師、茲より対える無し。低頭して良久す。更に數言を進むるに、鴻山皆な之を納れず。遂に為に道わんことを請う。鴻山云く、「吾道うこと当らず。汝、自ら道得せよ。是れ汝が眼目なり」。師遂に堂中に帰り、遍く冊子を檢すも亦た一言の対うべき無し。遂に一時に之を燼く。學人有りて近前して取ることを乞う。師云く、「我れ一生より來た他に帶累せらる。汝、更に之を要めて奚為せん」。並な之を与えず、一時に燼けり。師曰く、「此の生に佛法を学ばず。余自ら生來、當ること有ること無しと謂えり。今日、鴻山に一撲に淨尽せらる。且つ一つの長の行粥飯僧と作りて一生を過ごさん」。遂に鴻山を礼辞するに、両涙して門を出づ。

③因到香巖山忠國師遺跡、撫心懇泊。併除草木散悶。因擊擲瓦礫次失笑。因而大悟。乃作偈曰、「一拄忘所知、更不自修持。处处無蹤跡、声色外威儀。十方達道者、咸言上上機。便罷歸室、焚香具威儀、五體投地、遙禮鴻山讚曰、真善知識、具大慈悲、拔濟迷品。當時若為我道却、則無今日事也。」

(V—八一～八二)

(3) 香巖の大悟を仰山に驗される——仰山の評(ため)

便上鴻山、具陳前事、並發明偈子呈似。和尚便上堂、令堂維那呈似大衆、大衆惣賀。唯有仰山、出外未歸。仰山歸後、鴻山向仰山說前件因緣、兼把偈子見似仰山。仰山見了、賀一切後、向和尚說、雖則與摩發明、和尚還驗得他也無。鴻山云、不驗他。仰山便去香巖處、賀喜一切後、便問、前頭則有如是次第了也。然雖如此、不息衆人疑。作摩生疑讐。將謂預造、師兄已是發明了也。別是氣道、造道將來。香巖便造偈對曰、去年未是貧、今年始是貧。去年無卓錐之地、今年錐亦無。仰山云、師兄在知有如來禪、且不知有祖師禪。

因みに香巖山の忠國師の遺跡に至り、撫心懇泊す。草木を併除して悶を散す。因みに瓦礫を擊擲する次に失笑す。因りて大悟す。乃ち偈を作りて曰く、「一ちう拄に所知を忘ず、更に自ら修持せず。处处に蹤跡無し、声色外の威儀。十方の達道者、咸みな上上の機と言ふ。」便ち罷やめて室に帰り、香を焚いて威儀を具し、五體投地して、遙かに鴻山を礼して讚じて曰く、「真の善知識は、大慈悲を具し、迷品を拔済す。當時若し我が為に道却せば、則ち今日の事無からん。」

便(6)ち鴻山に上り、具さに前事を陳べ、並びに發明の偈子をもて呈似す。和尚便ち上堂して堂維那をして大衆に呈似せしむるに、大衆惣すう賀す。唯だ仰山有るも、外に出でて未だ帰らず。仰山帰りて後、鴻山、仰山に向かつて前件の因縁を説き、兼て偈子を把りて仰山に見似す。仰山見了りて一切を賀して後に、和尚に向かつて説く、「与摩に發明すと雖いえど則いえども、便ち香巖の處に去きて一切を賀喜して後、便ち問う、「前頭は則ち是の如き次第有り了れり。此の如きと然雖いえども、衆人の疑そともを息めず。作摩生か疑讐にあらかじ。預つくめ造れりと將謂おもえるに、師兄、已に是れ發明し了れり。別に是れ氣道なり。造れりしことを道い将ち來たれ」。香巖便ち偈を造りて対えて曰く、「去年は

未だ是れ貧ならず、今年始めて是れ貧なり。去年、錐さりを卓たつる地無し、今年は錐も亦た無し」。仰山云く、「師兄、如來禪有るを知ること在るも、且つ祖師禪有るを知らず」。

(V—八二—八三)

(4) 口に樹枝をくわえて西来意を問わわれれば

師問僧、如人在高樹上、口喰樹枝、脚下踏樹、手不攀枝、下有人問、如何是西來意、又須向伊道。若道又被撲殺、不道違於他問。汝此時作摩生指他、自免喪身失命。虎頭招上座返問、上樹時則不問、未上樹時作摩生。師笑噓噓。

(V—八三)

(5) 団扇をくるくるまわすとは

問、如何是拠現在学。師以扇子旋轉示云、見摩見摩。

(V—八三)

師8、僧に問う、「如し人高き樹上に在りて口に樹の枝を喰くわえ、脚、樹を踏まず、手、枝を攀よらざして、下に人有りて『如何なるか是れ西來意』と問わば、又た須らく伊に向かつて道うべし。若し道わば又た撲殺せられる。道わざれば他の問い合わせに違う。汝、此の時作摩生か他に指し、自ら喪身失命を免まぬるや」。虎頭招上座返して問う、「樹に上る時は則ち問わず、未だ樹に上らざる時作摩生」。師笑いて噓噓す。

(6) 何が無表戒か

問、如何是無表戒。云、待闍梨還俗則為你說。

(V—八三)

問9う、「如何なるか是れ現在拠る学」。師、扇子を以て旋轉して示して云く、「見るや、見るや」。

問10う、「如何なるか是れ無表戒」。云く、「待に闍梨の還俗せば、則ち你が為に説かん」。

(7) 対境にとらわれない出会いとは

問、如何是声色外相見一句。云、某甲未住香嚴時、且道在什摩處。与摩時亦不敢道在。云、如幻人心心所念法。

(V一八三一八四)

(8) 音の出る前の言葉とは

問、如何是声前一句。師云、大德未問時則答。進曰、即今時如何。云、即今時問也。

(V一八四)

(9) 直截根源仏所印とは

問、如何是直截根源仏所印。師把杖拋下、撮手而去。

(V一八四)

(10) 古人の跡を指す頌

指古人跡頌曰。古人語、語中骨。如雲映秋月、光明時出沒。句裏隱、不适当。人玄会、暗商量。唯自肯、意不傷。似一物、不相妨。

(V一八四)

古人の跡を指す頌に曰く。⁽¹⁴⁾ 古人の語、語中に骨あり。雲の秋月を映うが如く、光明は時に出没す。句裏の隠、不当と当たり。人の玄会、暗に商量す。唯だ自ら肯つてのみ、意は傷かず。一物を似すに相い妨げず。

問う、「如何なるか是れ声色外の相見の一句」。云く、「某甲未だ香嚴に住せざる時、且く道え、什摩處いづれに在りしや」。「与摩の時亦た敢えて道わざる在り」。云く、「幻人の心心の念する所の法の如し」。

(11) 楽普との為人問答

師与樂普同行。欲得相別時、樂普云、同行什摩処去。師云、去東京。普曰、去作什摩。師云、十字路頭卓庵去。普曰、卓庵作什摩。師云、為人。普曰、作摩生為人。師便擧起払子。普掌払子、作摩生為人。師便拋下払。普云、荒処猶過。在淨地、為什摩却迷人。師云、怪伊作什摩。

(V一八四)

(12) 励覺吟⁽¹⁷⁾

勵學吟^(覚カ)。滿口語、無処說。明明向道人不決。急着力、勤咬囁。無常到來救不徹。日裏話、暗嗟切。快磨古錐淨挑掲。理盡覺、自護持。此生事、吾不說。玄旨求他古老吟、禪學須窮心影絕。

(V一八四一八五)

師と樂普と同じく行く。相い別れんと欲得する時、樂普云く、「同行、什摩処に去く」。師云く、「東京に去く」。普曰く、「去きて什摩を作す」。師云く、「十字路頭に庵を卓て去る」。普曰く、「庵を卓てて什摩を作す」。師云く、「為人す」。普曰く、「作摩生か為人する」。師便ち払子を擧起す。普「払子を擧して作摩生か為人する」。師便ち払を拋下す。普云く、「荒処猶お過ぐるがごとし。淨地に在るに、什摩と為てか却に人を迷わす」。師云く、「伊を怪しみて什摩を作す」。

勵覺吟⁽¹⁸⁾。満口の語、説く處無し。明明として道に向かうも、人、決せず。急に力を着け、咬囁^(こうぢ)を勤めよ。無常到来するも救い徹せず。日裏の話、暗に嗟くこと切なり。快く古錐を磨けば、淨、挑掲^(ちようけい)す。理尽きれば覺し、自ら護持せよ。此の生の事、吾れ説かず。玄旨他に求めば古老の吟、禪學は須らく心影の絶を窮むべし。

(13) 宗教を誠め物を接する頌

師誠宗教接物頌曰。三句語、究人玄。迅面目、示豁然。開兩路、備機縁。投不遇、說多年。

師、宗教を誠め物を接する頌に曰く。三句の語、人の玄を究む。迅^(はや)面目、示すこと豁然。両路を開き、機縁を備う。

(14) 香巌下の僧と洞山との問答

洞山問僧、離什摩処來。對云、離香巌來。山云、有什摩仏法因縁。對云、仏法因縁即多。只是愛說三等照。山云、拳看。學人拳云、恒照常照本來照。洞山云、有人問此三等照也無。對云、有。山云、作摩生問。對云、作摩生是恒照、又問、常照。山云、好問處不問。僧問、請師垂個問頭。洞山云、問則有。不用拈出。緣作摩故、闍梨千鄉萬里來、乍到者裏、且歇息。其僧纔得個問頭、眼淚落。洞山云、哭作什摩。對云、啓和尚。末代後生、伏蒙和尚垂方便、得這個氣道。一則喜不自勝、二則恋和尚法席、所以與摩淚下。洞山云、唐三藏又作摩生。從唐國去西天十萬八千里、為這個仏法因縫、不惜身命、過得如許多嶮難。所以道、五天猶未到、兩眼淚先枯。雖則是從此香巌千鄉萬里、為仏法因縫、怕個什摩。其僧下山、却歸香巌。從容得二日。師戴帽子上堂。其僧便出來問、承師有言、恒照常照本來照。三等照則不問、不照時喚作什摩。師便却下帽子、拋放衆前。其僧却歸洞山、具陳前事。洞山却低頭後云、實與摩也無。對云、實與摩。洞云、若也實與摩、研頭也無罪過。其僧却歸香巌、具陳前事。師下牀、向洞山合掌云、新豐和尚是作家。

洞山⁽²⁰⁾、僧に問う「什摩処をか離れ來たる」。対えて云く、「香巌を離れ來たる」。山云く、「什摩の仏法の因縫か有る」。対えて云く、「仏法の因縫即ち多し。只だ是れ三等の照を説くを愛す」。山云く、「拳し看よ」。學人拳して云く、「恒照と常照と本來照なり」。洞山云く、「人有りて此の三等の照を問うや」。対えて云く、「有り」。山云く、「作摩生か問う」。対えて云く、「作摩生か是れ恒照なる。又た常照を問う」。山云く、「好き問處は問わず」。僧問う、「請う師、个の問頭を垂れよ」。洞山云く、「問えれば則ち有り。拈出を用いづ。作摩に縫るが故に、闍梨は千鄉万里し來たり、乍ちに者裏に到りて、且つ歇息するや」。其の僧、纔かに个の問頭を得て、眼の涙落つ。洞山云く、「哭して什摩をか作す」。対えて云く、「和尚に啓す。末代の後生、伏して和尚の方便を垂るるを蒙り、這個の氣道を得たり。一は則ち喜び自ら勝^{たたか}えず。二は則ち和尚の法席を恋う。所以に与摩に涙下る」。洞山云く、「唐の三藏又た作摩生。唐國より西天に去くこと十萬八千里にして、這個の仏法の因縫の為に身命を惜まず、如許多の嶮難を過得せり。所以に道う、五天猶お未だ至らずも、兩眼の涙先

づ枯る、と。是れ此より香嚴の千鄉万里なりと雖則も、仏法の因縁の為に个の什摩をか怕る」。其の僧、山を下りて香嚴に却帰る。從容として二日を得たり。師、帽子を戴りて上堂す。其の僧、便ち出で來たりて問う、「承るに師の言えること有り、恒照と常照と本来照なり、と。三等の照は則ち問わず、照ざざる時は喚んで什摩と作す」。師便ち帽子を却下し、衆前に拋放す。其の僧、洞山に却帰り、具さに前事を陳ぶ。洞山却に低頭して後に云く、「實に与摩なるや」。対えて云く、「實に与摩なり」。洞云く、「若也し實に与摩ならば、頭を研るも也た罪過無きなり」。其の僧、香嚴に却帰り、具さに前事を陳ぶ。師、牀を下りて洞山に向かつて合掌して云く、「新豊和尚は是れ作家なり」。

(V—八五—八六)

(15) 最後の頌

最後頌曰。有一語、全規矩。休思量、不自許。路逢同道人、
(揚眉)楊眉省來処。踏不着、多疑慮。却思量、帶伴侶。一生參學事
 無成、慇懃抱得梅檀樹。

(V—八六—八七)

⁽²¹⁾ 最後の頌に曰く。一語有り、規矩に全し。思量することを休め、自ら許さざれ。路に同道の人には逢え、(揚眉)楊眉して來処を省る。踏不着ならば、疑慮多し。思量を却け、伴侶を帶びす。一生參學の事成する無く、慇懃に抱得す、梅檀の樹。

(16) 常在の頌

常在頌。管帶歷歷、諸辺寧息。平常見聞、不入榛棘。四威儀

⁽²²⁾ 常在の頌。管帶歷歷として、諸辺寧息す。平常の見聞、榛

中、淨潔析析。機感相投、一時拋擲。默処対縁、声前顕跡。
同道相知、不勞勢力。

(V—八七)

棘に入らず。四威儀中、淨潔析析たり。機感相い投じて、一
時に拋擲す。默処、縁に対して、声前に跡を顕わす。同道相
い知り、勢力を労せず。

(17) 修行の頌

修行頌曰。天寒宜曝日、帰堂一食傾。思着未生時、宜然任他
清。只摩尋時、明鏡非明鏡。独坐覺靈涼、行時也只寧。

(V—八七)

修行⁽²³⁾の頌に曰く。天寒くして曝日^(よ)に宜し、堂に帰ること一
食傾。思着未だ生せざる時、宜然として他の清きに任す。只
摩だ尋ぬる時、明鏡は明鏡にあらず。独り坐して靈涼を覚す
れば、行く時も也た只寧^(ただ)なり。

(18) 鄭郎中に答える頌(一)

①鄭郎中問頌。既無人解、又無人縛。出此路歧、入何城廓。

②師頌答。語中埋跡、声前露容。即時妙会、古人道同。嚮應
機勸、無自他宗。訶起駭躋、曠迅成龍。

(V—八七)

鄭郎中の問頌。既に人の解くこと無く、又た人の縛する無
し。此の路歧を出でて、何の城廓に入るや。

師の頌に答う。語中に跡を埋め、声前に容を露わす。即時
に妙会せば、古人の道に同じ。嚮は機勸に応じ、自他の宗無
し。訶起すれば駭躋し、曠迅して龍と成る。

(19) 鄭郎中答える頌(二)——機を發す頌

①鄭郎中又問。來無他徹跡、去是非我途。併逐猿猴尽、山川
境在無。

②大師以發機頌答。語裏埋筋骨、音声染道容。即時纔妙会、

鄭郎中又た問う。来るも他の徹跡無し、去るも是れ我が途
にあらず。猿猴を併逐し尽さば、山川の境は在りや無しや。

大師、機を發す頌を以て答う。語裏に筋骨を埋め、音声、

拍手趁乖龍。

(V—八七)

道容に染む。即時に纔かに妙会せば、手を拍つて乖龍を趁^おう。

清思頌曰。尽日坐虛堂、靜思絕參詳。更無迴顧意、爭肯置平常。

(V—八八)

清思の頌に曰く。尽日、虛堂に坐す。靜思して參詳を絶す。更に迴顧の意無ければ、争か肯いて平常を置かん。

(20) 清思の頌

談玄頌曰。的的無兼帶、獨運何依賴。路逢達道人、莫將語默對。

(V—八八)

玄⁽²⁶⁾を談る頌。的的として兼帶無く、独り運んで何にか依頼せん。路に達道の人には逢えば、語黙を将^もつて対^{こた}えること莫かれ。

(21) 玄を談る頌

与学人玄機頌曰。妙旨迅速、言説來遲。纔隨語會、迷却神機。楊眉^(揚カ)當問、对面熙怡。是何境界、同道方知。

(V—八八)

学人玄機に与える頌に曰く。妙旨迅速にして、言説し來たること遅し。纔かに語に隨いて会せば、神機を迷却す。眉を揚げ、問い合わせに当りて、対面に熙怡す。是れ何の境界ぞ。同道にして方^はめて知る。

(22) 学人玄機に与える頌

渾淪語頌曰。一束茆、草六分。蓋得庵、無子門。藏頭人、入去却。転頭來、語渾淪。

渾淪の頌に曰く。一束の茆^{かや}、草六分す。庵を蓋得し、子門無し。藏頭の人、入去し却^おる。頭を転じて來たりて渾淪

(24) 猶預して虚しく光陰を度ること莫かれ

師為衆曰、此世界日月短促、則須急急底事了却去、平治如許多不如意事。直須如地相似、安然不動。一切殊勝境不隨転。只摩尋常、不用造作。獨脫現前、不帶伴侶。皎然秋月明、內外通透。尅念寸陰、直須此生了却。今生不了、阿誰替代。大德、莫待頭白齒黃、耳聾眼暗。無常到来、悔當何及。大德、身上是他衣、堂裏是他食。燈油火炭、床榻臥具、什方信心供須。將何道業消受。一念跡不尽、個个是債負。特達丈夫、氣志堅固、心如斷繩、休去三界因果、無斷現時富貴貧窮、苦樂之事、盡未來際、縱恣貪愛、熾造有漏。至于今日應當知足。過去諸佛、還從凡夫中修持去、無天生聖人。大德、本離鄉中、抛却父母出家、為什摩事。莫因循。莫猶預虛度光陰。古人道、寄語參玄人、光陰莫虛度。百丈云、努力一生須了却、誰能累劫受諸殃。

師、衆の為に曰く、此の世界の日月は短促にして、則ち須らく急急底の事を了却し去り、如許多の不如意の事を平治すべし。直須らく地の如く相い似て安然として不動なるべし。一切殊勝の境の転に隨わず。只摩だ尋常に造作を用いず。獨脱現前して伴侶を帶せず。皎然たる秋月明らかにして内外通透す。寸陰を尅念して、直須らく此の生を了却すべし。今生に了らざんば、阿誰か替代せん。大德、頭白齒黃、耳聾眼暗を待つこと莫かれ。無常到来せば、悔ゆることも當た何ぞ及ばん。大德、身上は是れ他の衣にして、堂裏は是れ他の食なり。燈油火炭も床榻臥具も、什方信心の供須なり。何の道業を將つて消受せん。一念の跡の尽きざれば、個个是れ債負なり。特達の丈夫、氣志堅固にして、心、繩を断つ如く、三界の因果を休し去り、現時の富貴貧窮と苦樂の事を断ずること無くんば、尽未来際に、貪愛を縱恣し、熾^{さか}んに有漏を造らん。今日に至りて應當に知足すべし。過去の諸仏は、還つて凡夫中より修持し去りて、天生の聖人無し。大德、本とより郷中を離れ、父母を抛却して出家するは、什摩の事の為なるや。因循すること莫かれ。猶預して虚しく光陰を度ること莫わたり。

(V—八八（八九）

かれ。⁽³¹⁾ 古人道く、「參玄の人に寄語す、光陰、虚しく度ること莫かれ」。⁽³²⁾ 百丈云く、「努力すること一生にして須らく了却すべし。誰か能く累劫に諸殃を受けん」。

(25) 古を明かす頌

明古頌曰。古人骨、多靈異。賢子孫、密安置。此一門、成孝義。人未達、莫差池。須志固、遣狐疑。得安静、不傾危。向即遠、求即離。取即失、急即遲。無計校、忘覺知。濁流識、今古偽。一刹那、通變異。嵯峨山、石火起。内裏發、焚巔累。無遮欄、燒海底。法網疎、靈焰細。六月臥、去被衣。蓋不得、無仮偽。達道人、唱祖意。我師宗、古來諱。唯此人、善安置。足法財、具慙愧。不虛施、用處諦。有人問、小呵氣。更尋來、說米貴。

(V—八九（九〇）

⁽³³⁾ 古を明かす頌に曰く。古人の骨、靈異多し。賢子孫、密に安置す。此の一門、孝義を成す。人未だ達ずして差池すること莫かれ。須らく志固^(かた)として狐疑を遣るべし。安静を得て傾危せず。向かえば即ち遠く、求めば即ち離る。取れば即ち失い、急なれば即ち遅し。計校無く、覺知を忘る。濁流の識、今古の偽なり。一刹那、變異を通じ、嵯峨たる山、石火起くる。内裏より發し、巔累を焚き、遮欄無く、海底を焼く。法網疎^(疎)く、靈焰細かなり。六月に臥し、被衣を去る。蓋い得ず、仮偽無し。達道の人、祖意を唱う。我が師の宗、古來より諱む。唯だ此の人のみ善く安置す。法財を足し、慙愧を具す。施を虚しくせず、用處^(あきら)諦かなり。人有りて問うに呵氣を^(か)き、更に尋ね來たれば、米の貴^(たか)きを説く。

(26) 崔大夫に与える玄を暢べる頌

与崔大夫暢玄頌曰。達人多隱顯、不定露形儀。語下不遺跡、密密潛護持。動容揚古路、明妙乃方知。応物但施設、莫道不

⁽³⁴⁾ 崔大夫に与える玄を暢べる頌に曰く。達人は隱顯多く、定んで形儀を露わさず。語下に跡を遺さず、密密として潜かに

思議。

(V—九〇)

護持す。動容は古路を揚げ、明妙なるひと乃ち方めて知る。
ものに応じて但だ施設す、道うこと莫かれ、不思議なりと。

宝明頌曰。思清人少慮、風規自然足。影落在音容、孤明絶擇
触。

(V—九〇)

(27) 宝明の頌

出家頌。從來求出家、未詳出家称。起坐只尋常。更無小殊
勝。

(V—九〇)

(28) 出家の頌

宝明の頌に曰く。思い清ければ人、慮いを少かき、風規自然
⁽³⁶⁾に足る。影落は音容に在り、孤明は擇どうしよく触たを絶つ。

(29) 法堂に寄せる頌

寄法堂頌。東間裏入寂、西間裏語話。中間裏睡眠、通間裏行
道。向前即檢校(検校カ)、向後即隱形。時人都不措、問什摩精靈。
答曰。淨地上鼓怒、怡然中伴嗔。平坦處不守、危嶮中藏身。
盲韻遇之眼開、僧瑤駐筆凝神。

(V—九〇~九一)

出家の頌。從來、出家を求むるに、未だ出家の称を詳つまりか
⁽³⁷⁾にせず。起坐只だ尋常にして、更に小殊勝無し。

法堂に寄せる頌。東間裏に入寂し、西間裏に語話す。中間
裏に睡眠し、通間裏に行道す。向前に即ち檢校し、向後に即
ち隱形す。時人都まくて措おかずして、什摩の精靈かと問う。答え
て曰く。淨地上に怒りを鼓ならし、怡然中に嗔いかりを伴う。平坦の
處に守らず、危嶮中に身を藏かくす。盲韻は之に遇いて眼開け、
僧瑤は筆を駐とどめて神を凝こらす。

(30) 玄旨の頌

玄旨頌曰。去去無標的、來來只摩來。有人相借問、不語笑咳

⁽⁴⁰⁾ 玄旨の頌に曰く。去去するに標的無し、來來するに只摩ただ

咳。

(V—九一)

來たる。人有りて相い借問す、語らずして笑い咳咳たり。

(31) 同住に贈る寂に帰る頌

贈同住。帰寂頌。同住道人七十余、共辞城郭樂山居。身如寒木心芽絶、不話唐言休梵書。心期尽處身雖喪、如來弟子沙門様。深信共崇鉢塔成、巍巍置在青山嶂。觀夫參道不虛然、脫去形骸甚高上。從來不說今朝事、暗裏埋頭隱玄暢。不留蹤跡異人間、深妙神光飽明亮。

(V—九一)

(32) 学を勧むる頌

勸學頌曰。出家修道莫求安、失念求安學道難。未得直須求大道、覺了無安無不安。

(V—九一)

同住⁽⁴¹⁾に贈る。寂に帰る頌。同住の道人、七十余り。共に城郭を辞して山居を楽しむ。身は寒木の如く、心芽を絶つ。唐言を話らず、梵書を休む。心期尽きる処、身も喪ぶと雖も、如來の弟子にして沙門の様なり。深く信じ共に崇び鉢塔成る。巍巍として置在す青山の嶂。夫の參道を観て虚然ならず、形骸を脱去して甚だ高上なり。從來、今朝の事を説かず、暗裏に頭を埋めて玄暢を隠す。蹤跡を留めず、人間に異なる、深妙の神光、飽くまで明亮なり。

志守得破頌云。十五日已前、師僧莫離此間。十五日已後、師僧莫住此間。去即打汝頭破、住即亦復如然。不去不住、事意如何。是即是、擬即差。

(33) 志を守りて得破する頌

学を勧むる頌に曰く。出家修道して安⁽⁴²⁾を求むること莫かれ、失念して安を求むれば學道は難し。未だ得ざれば直須らく大道を求むべし。覺り了れば安も無く不安も無し。

志⁽⁴³⁾を守りて得破する頌に云く。十五日已前、師僧、此間を離ること莫かれ。十五日已後、師僧、此間に住まること莫かれ。去けば即ち汝が頭を打ち破り、住まれば即ち亦復た如

(V—九一) 然なり。去かず住まらず、事意如何。是は即ち是なるも、擬すれば即ち差う。

辭見聞頌曰。好住遙分離、幽宗人跡稀。從來未登陟、無計遣狐疑。

(34) 見聞を辞する頌

(44) 見聞を辞する頌に曰く。好住、遙に分離す、幽宗、人跡稀なり。從来、未だ登陟せざれば、計無くして狐疑を遣る。

(35) 分明の頌

分明頌。頓喪命根、威德自足。一物不似、規矩現前。

(V—九二)

(45) 分明の頌。頓に命根を喪い、威徳自ずから足る。一物似せず、規矩現前す。

(36) 古路に遵う頌

遵古路頌。与郎中。虛心越境淨思量、句裏無蹤声外詳。文字影像駭驚覺、動容彈指飽馨香。

(V—九二)

(46) 古路に遵う頌。郎中に与う。虛心にして境を越えて思量を淨む。句裏に蹤無くして声外に詳かなり。文字影像、駭驚覺して見る、動容彈指、馨香に飽く。

(37) 董兵馬使の与に説示する偈

(董力) 与董兵馬使説示偈。宿静心意到山中、為求半偈契神蹤。向道却思不得、却被尋思碍不通。

(V—九二)

(47) 董兵馬使の与に説示する偈。心意を宿静して山中に到る。為に半偈を求めて神蹤に喫う。道に向かいて思を却けば、思い得ず、却つて尋思を被り、碍りて通ぜず。

(38) 志を専^{もつば}らにする頌

専志頌。宛転宛転、究尽疑見。只摩分明、無生已恋。内外不思、未露眉面。如夢踏蛇、驚人頓変。

(V一九二)

⁽⁴⁸⁾志を専らにする頌。宛転宛転たり。疑見を究尽す。只摩だ分明にして己恋を生ずること無し。内外に思わざれば、未だ眉面を露わさず。夢に蛇を踏む如く、驚人頓に変ず。

(39) 学人の宗教と宗如に与える頌

与学人宗教宗如。満寺釈迦子、未詳釈迦經。喚來試共語、開口雜音声。

(V一九二)

⁽⁴⁹⁾学人の宗教と宗如に与う。寺に満つ釈迦の子、未だ釈迦の經を詳かにせず。喚び来たりて試みに共に語るに、口を開けば雜な音声。

(40) 三句の後の意の頌

三句後意頌。書出語多虛、虛中帶有無。却向書前会、放却意中珠。

(V一九二)

⁽⁵⁰⁾三句の後の意の頌。書き出す語、虛多し、虛中に有無を帶す。却^{かえ}つて書く前に向^おいて会し、意中の珠を放却せよ。

(41) 謚号・塔号

自余化縁、終始年月、悉彰実錄。勅謚襲燈大師延福之塔。

(V一九二一九三)

自余の化縁、終始の年月、悉く⁽⁵¹⁾實錄に彰かなり、勅して襲燈大師、延福の塔と謚す。

(42) 香巖の疎山匡仁への讃 (『祖堂集』卷八の疎山匡仁章)

疎山和尚、嗣洞山。在撫州。師諱匡仁。未覩行錄、不叙終 —

⁽⁵²⁾疎山和尚、洞山に嗣ぐ。撫州に在り。師、諱は匡仁。未だ

始。師行脚時、到大安和尚處便問、夫法身者理絕玄微、不墮是非之境。此是法身極則。如何是法身向上事。安云、只這個是。師云、和尚與摩道、還出得法身也無。安云、不是也是。又到香嚴問、不從自己、不重他聖時如何。答、万機休擺、千聖不攜。師不肯、便下來吐出云、肚裏喫不淨潔物、有人報和尚處。和尚便喚來。師便上來。香嚴云、進問着。師便問、万機休擺則且置、千聖不攜是何言。香嚴云、是也。你作摩生道。師云、肯重不得全。香嚴云、你不無道理也。雖然如此、向後若是住山、則無柴得燒。若是住江邊、則無水得喫。欲臨說法時、須得口裏吐出不淨。後住疎山、如香嚴讖。

(43) 香嚴の頌 〈七六首〉(金沢文庫本)

道情は世情と交わらず、三毒の因縁次第に拋つ。果熟して任他い山鳥の採るとも、岩前に自ずから虎来たりて砲くこと

なり。你、作摩生か道う。師云く、「肯重、^{まつた}全^{まつた}きを得ず」。香嚴云く、「你、道理無きにあらず。此の如きと^{いえど}雖然も、向^{むか}後に若是も山に住すれば、則ち柴の焼くことを得る無し。若^も是も江辺に住すれば、則ち水の喫することを得る無し。説法に臨まんと欲う時、須らく口裏に不淨を吐出することを得べし。後に疎山に住す。香嚴の讖の如し。

(一一四九一五〇)

①道情不与世情交、三毒因縁次第拋。果熟任他山鳥採、岩前自有虎來砲。

②衣穿映水裁雲補、火尽囊中取□敲。閑學竺乾林下坐、従它頂上鵠來巢。

③幻入空門寂是非、頭陀年老転稍微。^{精イ}鉢中富有千家飯、身上青寒一衲衣。

④乞食奇霄龍已伏、經行宴坐虎曾困。不知今赴何天請、錫杖遙担雲水飛。

⑤暫辭雲水到人間、及到人間未勝山。一是非何日了、求名利幾時閑。

⑥溪邊月白真堪翫、嶺上松青更好看。浮世不知真入處、白雲空鎖又□閑。

⑦心如朗月連天淨、性似寒潭徹底清。無價夜光人不識、凡夫虛度幾千生。

⑧任運隨緣老比丘、一生無事也無優。白雲從聽飛將去、存得青山在即休。

有り。

衣も穿ち水に映ず、雲を裁ちて補う、火尽きて囊中に□をとりて敲つ。閑に竺乾を学して林下に坐す。従它い頂上なるとも鵠來たりて巢うことを。

幻じて空門に入りて是非を寂ぶ。頭陀年老いて転た精微なり。鉢の中は富んで千家の飯有り。身上に春寒し一衲衣。乞食寄霄するに、龍已に伏す、經行宴坐するに、虎曾て困む。知らず、今、何の天の請に赴くかを。錫杖遙かに担いて雲のごとく水のごとく飛ぶ。

暫く雲水を辞して人間に到る、人間に到るに及んで未だ山に勝れず。一是非、何の日か了ぜん。名を求め利を求めて幾の時か閑ならん。

溪邊の月白くして真に翫^{もてあそ}ぶに堪えたり、嶺上の松青くして更に見るに好し。浮世知らず、眞の入處なることを、白雲空しく鎖して又た関し……。

心は朗月の天に連りて淨きが如し、性は寒潭の底に徹して清きに似たり。無價の夜光、人識らず、凡夫虚しく度る幾千の生ぞ。

任運として縁に随う老比丘あり、一生無事にして也た優なること無し。白雲の従聽^{たと}い飛び将ち去るとも、青山を存得し、存すれば即ち休す。

⑨任運騰騰作老顛、何須論道復論禪。草將閑事來相撓、妨我長伸兩脚眠。

⑩我有真空無事禪、不將聲色化人天。談空縱使登蓮花、爭似岩間倚石眠。

⑪寒灰絕火已多時、景暮唯將一衲衣。不是山僧宜冷坐、雪深無處覓松枝。

⑫莫怪山僧不赴齋、都緣只恐道情乖。但知隨例喰松子、也要三文買草鞋。

⑬尋常不欲上高台、望見浮生實可哀。世界不知誰是主、前人去了後人來。

⑭一瓶一鉢一條藤^{枝也}、行盡青山幾万曇^{層カ}。若問老僧真姓學、大唐天子福田僧。

⑮獨登南獄最高峰、身似浮雲出大空。坐對月輪觀世界、浮生多在一塵中。

⑯山中無物堪相送、唯有凌霄帶雪枝。珍重野人宜折取、莫教岩下白雲知。

任運騰騰として老顛と作る、何ぞ須らく道を論じ復た禪を論すべけんや。閑事を将ち來たりて相い撓すこと莫かれ。我れ長えに両脚を伸べて眠ることを妨げん。

我れに真空無事の禪有り。声色を將て人天を化さず。空を談じて縱使^{たゞ}い蓮花に登るとも、争か岩間の石に倚りて眠るに似かん。

寒灰絶火は已に多時なり、景暮には唯だ一衲衣のみを將てり。是れ山僧の冷坐するに宜しからず。雪深くして処として松枝を覓むる無し。

怪しむこと莫かれ、山僧の齋に赴ざることを、都縁^{すべ}て只だ道情の乖くを恐るればなり。但だ知る、例に隨いて松の子を喰い、也た三文を要す、草鞋^{わらばき}を買うに。

尋常に高台に上らんことを欲わざれ、浮生を望み見るに實に哀れむべし。世界は知らず、誰か主なることを。前人去り了れば後人來たる。

一瓶一鉢、一條の藤、行じ尽す青山、幾く万層ぞ。若し老子福田僧なり。

独り南獄の最高の峰に登る、身は浮雲に似て大空を出づ。坐して月輪に対して世界を觀る。浮生多く一塵の中に在り。

山中に物の相い送るに堪えたる無し。唯だ凌霄の雪の枝を帶ぶる有り。珍重、野人、宜しく折取すべし、岩下の白雲をして知らしむること莫かれ。

⑯急風吹雪下青冥、旋作銀花点石屏。人間万物皆凋変、雲外一枝松柏青。

⑰不近君主与貴人、唯將雲水自相親。閑來石上看流水、欲洗禪衣未有塵。

⑲出門爭踏九衢塵、尽是浮生未了身。唯有福田衣下客、大家忙處作閑人。

⑳千株松下一身閑、不下山來數十年。月殿不將金鎖閉、夜來虎臥草庵前。

㉑三十年前曾此遊、木蘭新種院新修。如今再到經行處、樹老無花僧白頭。

㉒路遠山高万木秋、白雲岩畔水長流。年來月往無人到、百衲山僧不解愁。

㉓任聽魚龍吞碧海、從飛鸞鳳入清冥。終朝不礙方袍客、坐對孤雲倚石屏。

㉔隱處山深人事稀、空庵唯有鳥相依。白雲片片時來往、澗水潺潺去不歸。

㉕此身無事亦無悲、或在人間或翠微。持錫遠來寒月下、庭深

急に風、雪を吹いて青冥より下る。銀花を旋作して石屏を点ず。人間万物皆な凋変し、雲外の一枝は松柏青し。
君主と貴人とに近づかず、唯だ雲水を将て自ら相い親しむ。閑かに石上に来たりて流水を見て、禪衣を洗わんと欲うに未だ塵あらず。

門を出でて争か九衢の塵を踏まん。尽く是れ浮生、未だ身を了^{さと}らず、唯だ福田衣下の客のみ有り、大家の忙處に閑人と作る。

千株の松下に一身閑かなり、山を下らずして來た数十年。月殿に金鎖を將て閉さず、夜來より虎臥せり草庵の前。

三十年前、曾て此に遊ぶ、木蘭新たに種え院新たに修す。如今再び到る、經行の處、樹老いて花無く僧の白き頭。

路遠く山高くして万木の秋なり。白雲岩の畔、水長く流る。年來たり月往くも人の到る無し、百衲の山僧、愁いを解せず。

任聽^{たと}い魚龍の碧海を呑むとも、飛ぶに従つて鸞鳳、清冥に入る。終朝^{ひねもし}に礙えず、方袍の客、坐して孤雲に對して石屏に倚る。

隱處山深くして人事稀まれなり。空庵には唯だ鳥の相い依る有り。白雲片片として時に来往す。澗水潺潺^{せんせん}として去きて帰らず。

此の身無事にして亦た悲み無し。或は人間に在り、或は翠

衣冷帶霜帰。

徴にあり。錫を持ちて遠く來たる寒月の下、庭深く衣冷くして霜を帶びて帰る。

㉖野僧無喜亦無憂、只為從來得自由。身似浮雲心似月、浮雲不実月無秋。

野僧、喜びも無く亦た憂いも無し、只だ從來より自由を得るが為なり。身は浮雲に似て、心は月に似たり。浮雲は実ならず、月は秋無し。

㉗僧家無事最幽閑、近対青松遠対山。詩句不曾題落葉、恐隨流水到人間。

㉘澗水煎茶折竹枝、袈裟令落任風吹。看經祇有明窓下、葉落花紅總不和。

㉙踏石穿雲一老僧、白雲為伴水為朋。岩邊遇夜岩中宿、月上山來便是燈。

㉚一入青山便愛山、無心更擬出人間。但看流水長年急、何似浮雲覓日閑。

㉛雲自高飛水自流、生來無喜亦無憂。狂花任花一任風吹落、存

得青山在即休。

㉕百納禪僧万事閑、一生為愛住深山。流水任歸滄海出、白雲終不下人間。

僧家の無事は最も幽閑なり。近くは青松に対し、遠くは山に対する。詩句は曾て落葉に題せず、恐くは流水に隨いて人間に到ることを。

澗水煎茶、竹枝を折る。袈裟令落して風の吹くに任す。看經は祇だ明窓の下に有り、葉落ちて花紅なり、總て知らず。

石を踏み雲を穿つ、一りの老僧、白雲を伴と為し、水を朋と為す。岩辺に夜に遇いて岩中に宿す、月は山に上り来る、便ち是れ燈なり。

一たび青山に入りて便ち山を愛す、無心更に擬す、人間に出来づることを。但だ見る、流水の長年急なることを。何か浮雲の覓日に閑かなるには似かん。

雲は自ずから高く飛び、水は自ずから流る、生れ來たりて喜びも無く亦た憂いも無し。狂花は風の吹き落とすに一えに任す、青山を存得し、在れば即ち休す。

百納の禪僧、万事閑かなり。一生、深い山に住せんことを愛せんが為なり。流水は帰るに任す、滄海に出づることを。

白雲は終に人間に下らず。

③三衣已備鉢囊新、經行物外絕囂塵。禪門得理禪門去、莫作浮生半路人。

④城郭喧喧笑復歌、樂人念少苦人多。空門寂寞無余事、自是時人不肯過。

⑤一別翠微峰下寺、東西南北幾余秋。今來何事堪惆悵、童子為僧今白頭。

⑥莫向人間定是非、是非定了後何為。如カ知今休去便更カ休去、若覓了時無了時。

⑦身着田衣不種田、唯將一鉢望人煙。時人若問我家處、手指當心是脱カ 本源。

⑧三界無家誰是親、十方唯一空身。但隨雲水伴孤月、到處名山是主人。

⑨茆簷靜掛千山月、竹戶閑開一片雲。莫遣往来名利客、楷前踏破綠苔紋。

三衣已に備わり、鉢囊新たなり、物外に經行して囂塵を絶す。禪門に理を得れば禪門に去り、浮生半路の人と作ること莫かれ。

城郭喧喧として笑い復た歌舞、樂しむ人は念に少かるべし、苦しむ人は多かるべし。空門寂寞として余事無し、自ら是れ時人肯て過ぎず。

一たび翠微峰下の寺を別れて、東西南北幾個余の秋ぞ。今、來たりて何事か惆悵するに堪えたり。童子の僧と為りて、今、白頭なり。

人間に向て是非を定むること莫かれ。是非定め了りて後何為せん。如今休し去りて更に休し去るべし。若し了時を覗めば了時無し。

身に田衣を着け、田を種えず、唯だ一鉢のみを將て人煙を望む。時人若し我が家處を問わば、手もて当心を指し（是れ）本源なりと。

三界に家無し、誰か是れ親し。十方に唯だ一りの空身有り。但だ雲水に隨いて孤月を伴う、到る処名山は是れ主人なり。

茆簷には静かに掛かれり、千山の月。竹戸閑かに開く一片の雲。往来せしむること莫かれ、名利の客、楷前に踏破す、

綠苔の紋。

⑩曹溪石上淨無塵、独坐林泉得任真。幽鳥自啼花自笑、不于岩下坐禪人。

⑪一入空門別父顏、北堂休更望円還。多生有分終為貴、見你采花似等閑。

⑫落髮披緇出戒壇、分明應供向人間。持齋奉戒如水潔、見你采花似等閑。

⑬晚□□老見事難、不參宋祖不依山。平生只是担□我、空過光陰似等閑。

⑭又學經書不□禪、事持難脚踏郊塵。八□十二隨時過、失却袈裟似等閑。

⑮上服名衣不用求、縱然求得轉生愁。不如縫取無憂衲、披向

青山坐石頭。

⑯出家修道莫修身、修身不是出家人。破布袈裟千万綴、不見貧僧拌貴人。

曹溪の石上、淨うして塵無し。林泉に独座して真に任すことを得たり。幽鳥自ずから啼き花自ずから笑わん。岩下に坐禪の人あらず。

一たび空門に入りて父の顔に別る、北堂は休んで更に円還を望む。多生に分有り、終に貴しと為す。你が采花を見るに等閑なるに似たり。

髪を落とし緇を披て戒壇を出づ。分明に人間に應供す。齋を持し戒を奉じて水の潔きが如し。你が采花を見るに等閑なるに似たり。

晚……老、見る事難し。宗祖に参ぜず山に依らず。平生只だ是れ□我を担つ、空しく光陰を過ぐして等閑なるに似たり。

又た經書を学して禪を学ばず。事持して脚には難し、郊塵を踏むことを。八□十二、時に隨いて過ぐ、袈裟を失脚して等閑なるに似たり。

上は名衣を服し、求むることを用い。縱然い求め得るとも転た愁いを生ず。如かず、無憂の衲を縫取し、青山を披て、石頭に坐せんには。

出家修道するに身を修むること莫かれ、身を修むるは是れ出家人ならず。破布の袈裟は千万の綴、貧僧の貴人を拌する

を見ず。

④7咫尺煙霞不見山、颶颶松竹異人間。朝庭朱子千般貴、争如岩下野僧閑。

④8不用受他城郭住、青山自有野僧家。莫教衣上煙霞色、恋着人間桃李花。

④9南望天高定錫飛、障雲深處日藏輝。空中有路誰言去、世上無家不道歸。

他の城郭に住するを用受せず。青山に自ずから野僧の家有り。衣上の煙霞の色をして人間の桃李の花を恋着せしむること莫かれ。

南に望めば天高く定錫飛び、障雲の深處に日、輝ひかりを藏かくす。空中に路有りて、誰か言う去ゆくことを。世上に家無ければ帰ると道わづ。

⑤0老人若覓人間物、須向人間問古人。莫怪山僧無掃箒、都緣行處不生塵。

⑤1一納隨縁万事休、興來補毳恣閑遊。朝庭朱子百般貴、爭似空門老比丘。

老人若し人間の物を覗めば、須らく人間に向て古人に問うべし。怪しむこと莫かれ、山僧に掃箒無きことを。都縁オベて行處に塵を生ぜず。

一納、縁に随つて万事休す。興おき来たりて毳ほいを補いい、恣ほいいままに閑遊す。朝庭の朱子、百般貴し、争か似しかん、空門の老比丘に。

⑤2抖擣振打力多年穿破衲、縊纏濫謔力一半遂雲飛。拈來担向肩頭上、也勝時人着綿衣。

⑤3錫杖依持三十年、不曾携出石岩前。杖頭掛向虛空裏、争得声名徹九天。

⑤4妙相圓明是我身、本来清淨絕纖塵。莫教一滴人間水、汚我

抖擣す多年、衲を穿破す。濫謔す一半、雲を遂うて飛ぶ。拈來して肩頭上に担い、也た勝れり、時人の綿衣を着るに。錫杖依持すること三十年。曾て石岩の前に携え出さず。杖頭、虛空裏に掛けて、争か声名の九天に徹するを得ん。

妙相圓明なるは是れ我が身、本来清淨にして纖塵を絶す。

虚空白月輪。

一滴の人間の水をして我が虚空の白月の輪を汚さしむること
莫かれ。

⑤5山僧持鉢世人輕。雨滴袈裟褐色青。隔簾不見桃花面、空裏
誰聞慚愧声。

⑤6九霄孤鶴徧宜靜、百衲山僧不獸窮。為掛雪峰無一事、浮生
一任是非空。

⑤7登山坐石哭垂綸、終日浮沈波浪邊。貪着百川無限水、不知
何處是根源。

⑤8野老山根不下堦、霍眉一似雪分開。門前問取枯松樹、少作
沙弥親手栽。

⑤9日出光來照岳東、高岩堪看野花紅。獮猴抱子松杖下、偷眼
低頭弄老翁。

⑥0擬欲移庵上碧峰、只愁雲霧隔二重。惟聞月裏長生桂、不見
山頭凍花松。

⑥1閑來石上看長松、百衲袈裟破又縫。今日不愁明日飯、生涯

山僧、鉢を持す、世人軽くす。雨滴の袈裟、褐色青し。
簾を隔てて桃花の面を見ず、空裏には誰か聞かむ、慚愧の
声を。

九霄の孤鶴、徧く宜く静なるべし、百衲の山僧、窮を獸わ
ず、雪峰に掛けて一事無きが為なり。浮生は一えに是非の空
に任す。

山に登り石に坐して哭いて綸を垂る、終日浮沈す、波浪
の邊。百川を貪着する、限り無き水、知らず、何の處か是れ
根源ならん。

野老は山の根にして堀を下らず、霍眉は一えに雪の分開す
るに似たり。門前に問取す、枯たる松樹、少して沙弥と作り
しどき親しく手ら栽えき。

日出でて光來たりて岳の東を照らす、高岩には野花の紅な
ることを見るに堪えたり。獮猴は子を抱いて松杖の下、眼を
ひそめ頭を低れて老翁を弄ぶ。

庵を移して碧峰に上らんと擬欲すれば、只だ愁う、雲霧の
二重を隔つるを。惟だ聞る、月裏に長に桂を生じて、山頭に
凍花する松を見ず。

閑かに石上に來たりて長松を見る、百衲の袈裟、破れば又

只在鉢盂中。

た縫う。今日、明日の飯を愁えず、生涯只だ鉢盂の中に在り。

⑥2 岩谷高低一径開、有僧修不惹塵埃。閑持經卷倚松立、笑問客從何處來。

⑥3 日月凌空寧有待、孤雲出岫本無心。三賢十聖由難見、八小カ果學人何處尋。

⑥4 祝融峰頭万余層、步步攀蘿策杖登。上到月宮仙桂寺、白雲相伴兩三僧。

⑥5 清淨高僧正少年、苦心學道復參禪。時人問我無生法、向道一輪月在天。

⑥6 學道先須削骨貧、直教心地絕纖塵。囊中若有青銅片、昭暗カ

岩谷の高低、一径開けり、僧有りて修めて塵埃に惹れず。閑りに經卷を持して松に倚りて立てり。笑いて問う、客、何の處よりか来ると。
日月空を凌ぐ、寧ろ待つこと有らんや。孤雲、岫を出でて本とより無心なり。三賢十聖は見難きに由る、小果の學人、何の處にか尋ねん。

祝融峰の頭、万余の僧、步步に蘿を攀て杖を策て登る。上り到る、月宮仙桂寺、白雲に相い伴う、兩三僧。

清淨の高僧、少年より正し。心を苦にして道を學し復た禪に參ず。時人、我に無生の法を問わば、向かつて道わん、一輪の月、天に在ると。

學道は先づ須らく骨を削りて貧なるべし。直に心地をして纖塵を絶たしめよ。囊中に若し青銅の片有らば、暗裏に神に祈らば人を笑教せん。

⑥7 不是山僧逞倒狂、愛將破衲作衣裳。時人只見形骸醜、不見靈台一点覺。

是れ山僧が倒狂するを逞くして、愛して破衲を將て衣裳を作りたるにあらず。時人只だ形骸の醜きを見るのみ。靈台の一点の覺を見ずや。

⑥8 石楷池畔有紅蓮、嬾藥初生一両錢。莫怪不多遮水面、放他明月下秋天。

して秋天より下さしめることを放す。

⑥9一輪明月上楷前、数片雲帰洞裏天。因聴岩簷幽鳥語、始知窓下有僧眠。

⑦0依山臨水結茅堂、静室安禪一柱^{柱カ}香。不是息心除妄想、都縁無事可思量。

⑦1莫向人間論是非、是非論得擬何為。如今休去便休去、若覓了時無了時。

⑦2朝見花開滿樹紅、暮觀花落樹還空。若將花樹此^{比カ}人間、花与人間事一同。

⑦3山中也見毳衣僧、二十年來不点^{燈イ}灯。明暗不知何處去、未逢知識且騰騰。

⑦4百計千方百身、不知身是塚中塵。莫言白髮無言語、此是黃泉伝語人。

⑦5端居宝刹絕征徑、須感慈尊及聖朝。莫慢等閑空過日、十方^{施カ}信絕大難消。

一輪の明月、楷前に上りし、数片の雲帰る、洞裏の天。岩簷の幽鳥の語るを聴くに因りて、始めて知る、窓下に僧有りて睡ることを。

山に依り水に臨んで茅堂を結ぶ。静室に安禪す一柱の香。是れ心を息め妄想を除くにあらず。都縁て事として思量すべき無し。

人間に向て是非を論ずること莫かれ。是非論じ得て何為せんと擬るや。如今休し去りて更に休し去るべし。若し了時を覓めば了時無し。

山には見る、花開いて樹に満ちて紅なるを。暮には観る、花落ち樹還つて空しきを。若し花樹を将て人間に比べば、花と人間と事^{おなじ}一同。

山中に也た見る毳衣の僧を。二十年より來た^{このか}灯を点ぜず。明暗知らず、何の処にか去る。未だ知識に逢わざれば、且く騰騰たり。

百計千方百身の為なり。知らず、身は是れ塚の中の塵なるということを。言うこと莫かれ、白髮、言語無しと。此は是れ黄泉に語を伝える人なり。

宝刹に端居して征徑を絶すとも、須らく慈尊と及び聖朝とを感じずべし。慢に等閑に空しく日を過すこと莫かれ。十方の

(6) 縱使行藏混浴^{俗歎}塵、為縁衣食少資身。世人不会山僧意、將為山僧命分□。

信施、大いに消^{もち}い難し。

縍使^{たと}い行^かい藏^{かく}して俗塵に混^よずるとも、衣食に縁^よつて少しき身を資^{なす}けんが為なり。世人、山僧が意を会せずして、山僧が命を分つ□なりと將^{おも}為う。

(44) 香嚴智閑の大悟の因縁(二) (以下、「景德伝燈錄」卷一の香嚴智閑の章)

① 鄧州香嚴智閑禪師、青州人也。厭俗辭親、觀方慕道、依鴻山禪會。

② 祐和尚知其法器、欲激發智光。一日謂之曰、吾不問汝平生學解及經卷冊子上記得者、汝未出胞胎未弁東西時本分事、試道一句來。吾要記汝。師懵然無對。沈吟久之、進數語、陳其所解。祐皆不許。師曰、却請和尚為說。祐曰、吾說得是吾之見解、於汝眼目何有益乎。師遂歸堂、徧檢所集諸方語句無一言可將酬對。乃自歎曰、画餅不可充飢。於是盡焚之曰、此生不學佛法也。且作箇長行粥飯僧、免役心神。遂泣辭鴻山而去。

鄧州香嚴智閑禪師は、青州の人なり。俗を厭いて親を辭し、方を観て道を慕い、鴻山の禪會に依る。

祐和尚、其の法器なるを知り、智光を激發せんと欲う。一日之に謂いて曰く、「吾れ汝が平生の学解及び經卷冊子上に記得するものは問わず、汝未だ胞胎より出でず未だ東西を弁ぜざる時の本分の事、試みに一句を道い來たれ。吾れ汝を記せんと要す」。師、懵然として對うる無し。沈吟して久しくして數語を進め、其の所解を陳ぶるも、祐皆な許さず。師曰く、「却て請う和尚、為に説け」。祐曰く、「吾が説得するは是れ吾が見解なり。汝が眼目に於て何の益有らん」。師遂に堂に帰り、徧く集むる所の諸方の語句を檢べるに一言の将て酬對すべき無し。乃ち自ら歎じて曰く、「画餅は飢えを充たすべからず」。是に於て尽く之を焚いて曰く、「此の生に仏法を学ばず。且く箇の長^{とこなえ}の行粥飯僧と作りて、心神を役するを免れん」。遂に泣きて鴻山を辭し去る。

③抵南陽観忠國師遺跡、遂憩止焉。一日因山中芟除草木以瓦礫擊竹作声。俄失笑間、廓然省悟。遽歸沐浴焚香、遙礼鴻山贊云、和尚大悲、恩踰父母。當時若為我說却、何有今日事也。仍述一偈云、一擊忘所知、更不仮修治。处处無蹤迹、声色外威儀。諸方達道者、咸言上上機。

(東寺藏宋版一一七八頁)

(45) 道は悟によりて達す

師上堂云、道由悟達、不在言語。況見密密堂堂曾無間隔、不勞心意、暫借迴光、日用全功、迷徒自背。

(同一一七八一一七九)

(46) 何が香嚴の境か

問、如何是香嚴境。師曰、華木不滋。

(同一一七九)

(47) 何が仙陀婆か

問、如何是仙陀婆。師敲禪牀曰、過這裏來。

(同)

問⁵⁸う、「如何なるか是れ仙陀婆」。師曰く、「華木、滋ら⁵⁷ず」。

南陽に抵り、忠國師の遺跡を覗て、遂に憩止す。一日、因みに山中にて草木を芟除するに、瓦礫を以て竹を擊ちて声を作す。^{にわか}俄に失笑する間に、廓然として省悟す。遽に帰りて沐浴し香を焚いて遙かに鴻山を礼して贊じて曰く、「和尚の大悲は、恩、父母を踰ゆ。^{そなわ}當時、若し我が為に説き却^{あか}さば、何ぞ今日の事有らんや」。仍ち一偈を述べて云く、「一擊、所知を忘す。更に修治を仮らず。处处に蹤迹無し。声色外の威儀なり。諸方の達道者、咸み上上の機と言ふ」。

(48) 何が正命食か

問、如何是正命食。師以手撮^{つま}而示之。

(同)
示す。

(49) 何が仏法の大意か

問、如何是仏法大意。師曰、今年霜降早、喬麥摠不収。

(同)
一八〇)

問う、「如何なるか是れ仏法の大意」。師曰く、「今年の霜、降ること早し、喬麥、摠て收めず」。

(50) 何が西來意か

問、如何是西來意。師以手入懷出拳、展開与之。僧乃跪膝以兩手作受勢。師曰、是什摩。僧無對。

(同)
一八〇)

問う、「如何なるか是れ西來意」。師、手を以て懷に入れ拳を出して展開して之に与う。僧乃ち膝を跪づいて両手を以て受ける勢を作す。師曰く、「是れ什摩ぞ」。僧、対うる無し。

(51) 枯木で龍が吟く^{うめく}(→)

問、如何是道。師曰、枯木龍吟。僧曰、學人不會。師曰、觸體裏眼睛。玄沙別云、龍藏枯木。

(同)
一八〇)

問う、「如何なるか是れ道」。師曰く、「枯木に龍吟く」。僧曰く、「學人会せず」。師曰く、「觸體裏の眼睛」。〈玄沙別して云く、「龍、枯木に藏る」。〉

(52) 四句百非を離れた言葉

問、離四句、絶百非、請和尚道。師曰、獵師前不得說本師

問う、「四句を離れ、百非を絶し、請う和尚道え」。師曰

戒。

(同) く、「獵師の前に本師の戒を説くを得ず」。

(53) 滝山下の僧との払子の問答

師問僧、什麼処來。僧曰、滝山來。師曰、和尚近日有何言句。僧曰、人問如何是西來意、和尚豎起払子。師聞舉乃曰、彼中兄弟作麼會和尚意旨。僧曰、彼中商量道、即色明心、附物顯理。師曰、會即便會、不會着什麼死急。僧却問、師意如何。師還舉払子。^{〔玄沙云〕}只這香嚴、脚跟猶未点地。雲居錫云、什麼是香嚴脚跟未点地處。

(同一一八〇~一八一)

(54) 偲頌二百余篇の流行

師凡示學徒、語多簡直。有偈頌二百余篇、隨緣對機、不拘聲律、諸方盛行。後謚襲燈大師。

(同一一八一)

師⁽⁶⁴⁾、僧に問う、「什麼処より來たる」。僧曰く、「滝山より來たる」。師曰く、「和尚、近日、何の言句か有る」。僧曰く、「人の如何なるか是れ西來意と問わば、和尚、払子を豎起す」。師、舉するを聞いて乃ち曰く、「^{〔かし〕}彼中の兄弟は作麼に和尚の意旨を会すや」。僧曰く、「彼中の商量に道う、色に即して心を明かし、物に附して理を顯わす、と」。師曰く、「会すれば即ち便に會するのみ。会せずとも什麼の死急をか着けん」。僧却つて問う、「師の意は如何」。師還た払子を挙ぐ。^{〔玄沙云〕}只だ⁽⁶⁵⁾這の香嚴こそは、脚跟、猶お未だ地を点せざるが⁽⁶⁶⁾「とし」。雲居錫云く、「什麼か是れ香嚴の脚跟、未だ地に点ぜざる処」。

(同一一八〇~一八一)

(55) 香嚴襲燈大師の頌 ^{〔一九首〕} (『景德伝燈錄』卷二九所収)

師凡そ學徒に示すに、語多く簡直なり。偈頌二百余篇有り、縁に隨い機に対して、声律に拘らず、諸方に盛んに行なわる。後に襲燈大師と謚す。

①②③⑧⑨⑩⑪⑫⑯は『祖堂集』と重複するので省略。

④達道場。与城陰行者。理奥絶思量、根尋徑路長。因茲知隔闊、無那被封疆。人生須特達、起坐覺馨香。清淨如來子、安然坐道場。

⑤与薛判官。一滴滴水、一焰焰火。飲水人醉、向火人老。不飲不向、無復安臥。拗折弓箭、踢倒射塚。若人要知、先去鉤錐。人須問我、我是阿誰。快道快道。

⑥与臨濡県行者。丈夫咄哉、久被塵埋。我因今日、得入山來。揚眉示我、因茲眼開。老僧手風、書處龍鍾。語下有意、的出煩筆。

⑦顯旨。思遠神儀奧、精虛履践通。見聞離影像、密際語前蹤。得意塵中妙、投機露道容。藏明照驚覺、肯可達真宗。

旨を顯わす。思遠なれば神儀の奥、精虛なれば履践通ず。見聞は影像を離れ、密際は前蹤を語る。意を得れば塵中に妙にして、機を投ずれば道容を露わす。明を藏して照して驚覺し、肯つて真宗に達すべし。

⑬明道。思思似有蹤、明明不知處。借問示宗賓、徐徐暗迴顧。

⑭與鄧州行者。林下覺身愚、緣不帶心珠。開口無言說、筆頭無可書。人問香嚴旨、莫道在山居。

道場に達す。城陰の行者に与う。理奥は思量を絶す。根尋は徑路長し。茲に因りて隔闊を知り、那れ無くして封疆を被る。人生須らく特達すべし。起坐して馨香を覺ゆ。清淨なる如來子、安然して道場に坐す。

薛判官に与う。一滴の滴水、一焰の焰火。水を飲んで人酔い、火に向かって人老う。飲まず向かわざれば、復た安臥すること無し。弓箭を拗折して射塚を踢倒す。若し人、知らんと要せば、先ず鉤錐を去るべし。人須らく我れに問うべし、我れは是れ阿誰ぞと。快やかに道え、快やかに道え。

臨濡県の行者に与う。丈夫、咄なる哉。久しく塵に埋まる。我れ因みに今日、山に得入し來たる。眉を揚げて我れに示し、茲に因りて眼開く。老僧に手風あり、書く處に龍鍾する。語下に意有り、煩筆を的出せん。

道を明かす。思思として蹤有るに似たり、明明として処を知らず。借問せば宗賓を示し、徐徐として暗に迴顧せしむ。鄧州の行者に与う。林下に身の愚かなるを覺ゆ、縁は心珠を帶びず。口を開けば言説無く、筆頭に書くべき無し。人の

香嚴の旨を問わば、道うこと莫かれ、山居に在りと。

⑯三跳後。三門前合掌、両廊下行道。中庭上作舞、後門外搖頭。

⑰上根。咄哉莫錯、頓爾無覺。空処發言、龍驚一着。小語呼召、妙絕名邈。魏魏道流、無可披剝。

⑱破法身見。向上無爺娘、向下無男女。独自一箇身、切須了却去。聞我有此言、人人競來取。對他一句子、不話無言語。

⑲獨脚。子啐母啄、子覺無殼。母子俱亡、應緣不錯。同道唱和、妙云獨脚。

(同一六〇五~六〇七)

(56) 香嚴はまだ祖師禪を得ていない——仰山の評⁽¹⁾（以下、『景德伝燈錄』の香嚴智闇以外の章）

師問香嚴、師弟、近日見處如何。嚴曰、某甲卒說不得。乃有偈曰、去年貧未是貧、今年貧始是貧。去年無卓錐之地、今年錐也無。師曰、汝只得如來禪、未得祖師禪。⁽²⁾玄覺云、且道、如來禪与祖師禪分不分。長慶稜云、一時坐却⁽³⁾。

三跳の後。三門前に合掌し、両廊下に行道す。中庭上に舞を作し、後門外に頭を搖かす。

上根。咄なる哉、錯ること莫かれ、頓爾として覺無きことを。空処に言を發して、龍驚くこと一着。小語もて呼び召せば、妙に名邈を絶す。⁽⁴⁾魏魏たる道流、披剝すべき無し。

法身の見を破す。向上に爺娘無く、向下に男女無し。独自一箇の身、切に須らく了却し去るべし。我れに此の言有りと聞くに、人人競い来たりて取る。他に対える一句子は、話さず、言語無し。

獨脚。子啐⁽⁵⁾し母啄⁽⁶⁾す、子、殼無きことを覺ゆ。母子俱に亡ずれば、縁に応じて錯らず。道を同じくして唱和す、妙に独脚と云う。

師⁽⁶⁹⁾、香嚴に問う、「師弟、近日の見處は如何」。嚴曰く、「某甲、卒に説き得ず」。乃ち偈有りて曰く、「去年の貧は未だ是れ貧ならず、今年の貧は始めて是れ貧なり。去年、錐を卓つる地無し、今年は錐も也た無し」。師曰く、「汝只だ如來禪を得るのみにして、未だ祖師禪を得ず」。⁽⁷⁰⁾玄覺云く、「且らく道え、如來禪と祖師禪と分かつや分かたずや」。⁽⁷¹⁾長慶稜云く、

(卷一 仰山慧寂章、同一 一七四～一七五) — 「一時に坐却せよ」。

(57) 臨濟下の三聖慧然が参す

師到香巖。巖問、什麼処來。師曰、臨濟來。巖曰、將得臨濟劍來麼。師以坐具驅口打而去。

(卷一二三聖慧然章、同一二二九)

「⁽⁷²⁾臨濟より來たる」。巖曰く、「臨濟の剣を^も持ち得來たるや」。
師、坐具を以て驅口に打ちて去る。

(58) 枯木で龍が吟く⁽²⁾—石霜・曹山の拈語

僧挙、有人問香巖、如何是道。答曰、枯木裏龍吟。學云、不
会。曰、觸體裏眼睛。後問石霜、如何是枯木裏龍吟。石霜
云、猶帶喜在。又問、如何是觸體裏眼睛。石霜云、猶帶識
在。師因而頌曰、枯木龍吟真見道、觸體無職眼初明。喜識尽
時消不尽、當人那弁濁中清。其僧復問師、如何是枯木裏龍
吟。師曰、血脉不断。曰、如何是觸體裏眼睛。師曰、乾不
尽。曰、未審還有得聞者無。師曰、尽大地未有一箇不聞。
曰、未審龍吟是何章句。師曰、也不知是何章句、聞者皆喪。

僧⁽⁷³⁾挙す、「人有りて香巖に問う、「如何なるか是れ道」。答
えて曰く、「枯木裏に龍吟く」。學云く、「会せず」。曰く、
「觸體裏の眼睛」。後に石霜に問う、「如何なるか是れ枯木裏
に龍吟く」。石霜云く、「猶お識を帶ぶる在り」。又た問う、
「如何なるか是れ觸體裏の眼睛」。石霜云く、「猶お識を帶ぶ
る在り」。師因みに頌して曰く、「枯木に龍吟く、真に道を
見る、觸體識無し、眼初めて明らかなり。喜識尽^もきる時、消
い尽くさず。當人那ぞ弁ぜん、濁中の清なるを」。其の僧、
復た師に問う、「如何なるか是れ枯木裏に龍吟く」。師曰く
「血脉断たず」。曰く、「如何なるか是れ觸體裏の眼睛」。師曰
く、「乾き尽さず」。曰く、「未審し、還た聞く者を得ること
有るや」。師曰く、「尽大地に未だ一箇の聞かざるもの有ら
ず」。曰く、「未審し、龍吟くは是れ何の章句か」。師曰く、

(卷一七、曹山本寂章、同—三三一)～(卷一七、疎山光仁章、同—三三九) 「也た是れ何の章句かを知らず。聞く者皆な喪ぼろぶ」。

(59) 疎山と鏡清の香巖の語についての問答

師拳香巖語、問鏡清、肯重不得全、忿道者作麼生会。忿曰、全歸肯重。師曰、不得全肯者作麼生。忿曰、箇中無肯路。師曰、始惱病僧意。

(卷一七疎山光仁章、同—三三九)

(60) 西來意を問われば香巖の言葉を尻に敷け

問、如何是西來意。師曰、香巖道底一時坐却。

(卷一八長慶慧稜、同—三五九)

問76、「如何なるか是れ西來意」。師曰く、「香巖の道う底う」。師曰く、「始めて病僧の意に惱かなえり」。

師拳香巖語、問鏡清、肯重不得全、忿道者作麼生会。忿曰、全歸肯重。師曰、不得全肯者作麼生。忿曰、箇中無肯路。師曰、始惱病僧意。

師、香巖の語を挙げて鏡清に問う、「肯重、全きを得ず、忿道者、作麼生か会す」。忿曰く、「全て肯重に帰す」。師曰く、「全て肯うことを得ざるは作麼生」。忿曰く、「箇中は肯路無し」。師曰く、「始めて病僧の意に惱かなえり」。

(一九九一、七、一五)

(つづく)